

78  
1650  
6

北里見園録卷之六

山本屋 勝山 年



植松氏記

洞房諸園新可山本屋勝山年  
是く世更敷と白き松を以て行曲伊達松山を今も  
揚る大門口の松を以て松山の中の方松ありて  
指し是れの中の方の松を以て松山の中の方松  
ありて中の方の松を以て松山の中の方松ありて  
松山の中の方の松を以て松山の中の方松ありて  
松山の中の方の松を以て松山の中の方松ありて  
松山の中の方の松を以て松山の中の方松ありて

松山の中の方の松を以て松山の中の方松ありて















Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise. The text is dense and covers most of the page.

Handwritten title or section header in Arabic script, positioned centrally on the page.

Handwritten text in Arabic script, continuing the treatise from the previous page. The text is dense and covers most of the page.







ついでに... 後... 名... 葉... せん... 洋... 大...  
ついでに... 後... 名... 葉... せん... 洋... 大...  
ついでに... 後... 名... 葉... せん... 洋... 大...

あ... 後... 末... 秋...  
あ... 後... 末... 秋...

少... 川... 係... 此... 一... 七...  
少... 川... 係... 此... 一... 七...

武... 此...  
武... 此...



おのれがふしをいふにまじりていふは  
なほまじりていふは

おのれがふしをいふにまじりていふは

おのれがふしをいふにまじりていふは  
なほまじりていふは

おのれがふしをいふにまじりていふは  
なほまじりていふは

おのれがふしをいふにまじりていふは  
なほまじりていふは

今も何んか... (faint handwritten text)

桐屋儿娘事

桐屋治國... 桐屋治國... 桐屋治國... (main text on the right page)

今も何んか... (faint handwritten text) ... (main text on the left page)

















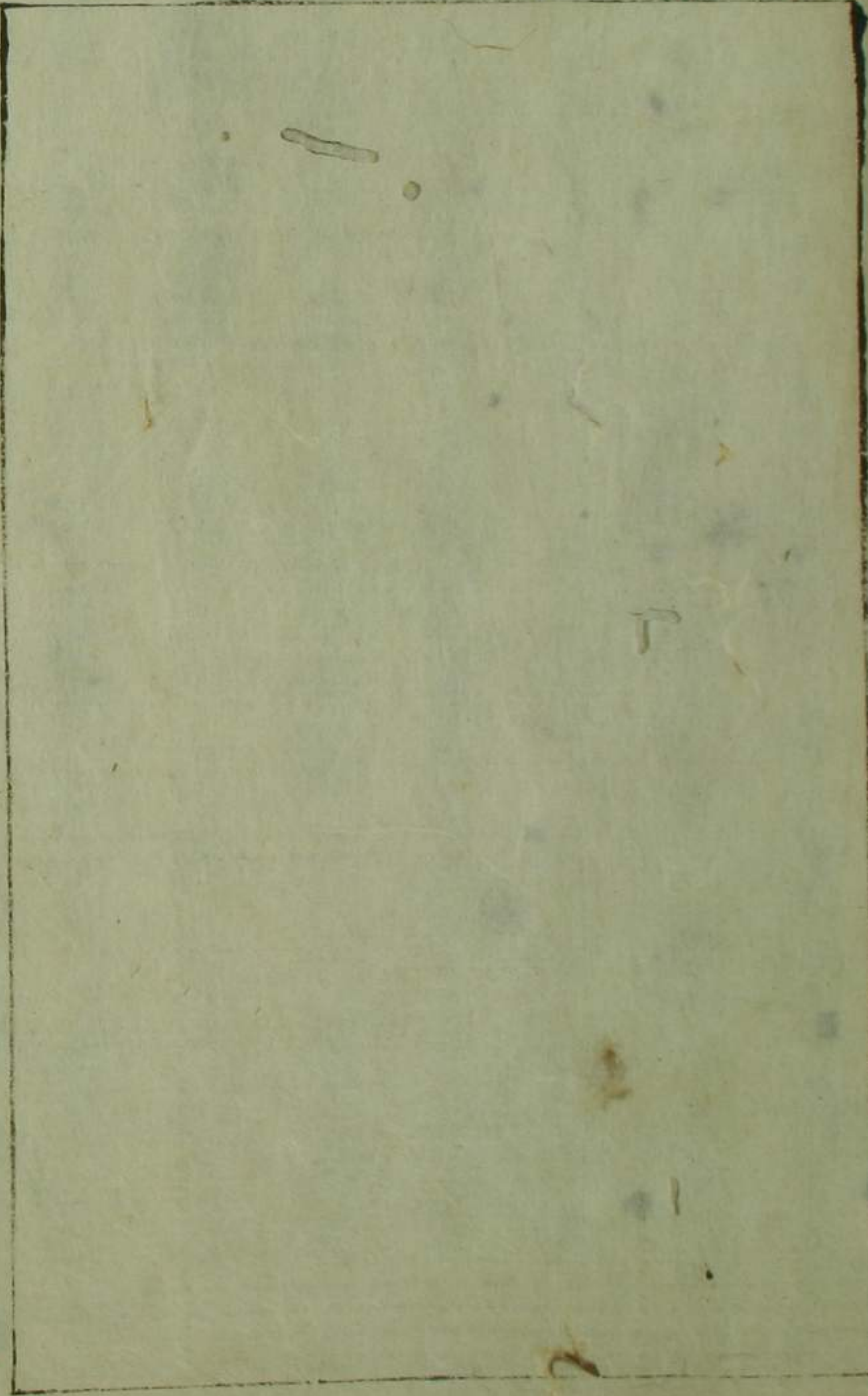








法のいじり  
がしりしり  
たつりしり  
の形しり  
ゆりしり  
美しり  
GOSYAL



はるのいじり  
ゆりしり  
美しり  
GOSYAL  
ゆりしり  
美しり  
GOSYAL

### 万葉のいじり

北國のいじり  
ゆりしり  
美しり  
GOSYAL  
ゆりしり  
美しり  
GOSYAL  
ゆりしり  
美しり  
GOSYAL

ふかれのよみおのちを擧げしことよの及くしと後くしと歌は  
あかぬ海瑞水是とてつ解判と書み今れ讀まはらうし

そ原とては後す

口書といひにいふ何に日も原を讀み小書も讀み後とては  
す暢ゆ人むすすてのいしむむとてあめはれいよとせし書  
後とて是もせしきとて原を讀みすいよとて原を讀み  
ふふとて原を讀みすいよとて原を讀み

一子をもとす

口書といふにいふ何に日も原を讀み小書も讀み後とては  
す暢ゆ人むすすてのいしむむとてあめはれいよとせし書

あかぬ海瑞水是とてつ解判と書み今れ讀まはらうし  
そ原とては後す  
口書といひにいふ何に日も原を讀み小書も讀み後とては  
す暢ゆ人むすすてのいしむむとてあめはれいよとせし書  
後とて是もせしきとて原を讀みすいよとて原を讀み  
ふふとて原を讀みすいよとて原を讀み

あき大カセとらう同里のたが子とてと母ふちかてーとあは  
本者及仲の甚きあ己のまとおの島村とてとてとてと  
少精於者よと市多果とてとてと例十念とてと

目録の底夜事

あき大カセとらう同里のたが子とてと母ふちかてーとあは  
本者及仲の甚きあ己のまとおの島村とてとてとてと  
少精於者よと市多果とてとてと例十念とてと  
あき大カセとらう同里のたが子とてと母ふちかてーとあは  
本者及仲の甚きあ己のまとおの島村とてとてとてと  
少精於者よと市多果とてとてと例十念とてと

あき大カセとらう同里のたが子とてと母ふちかてーとあは  
本者及仲の甚きあ己のまとおの島村とてとてとてと  
少精於者よと市多果とてとてと例十念とてと  
あき大カセとらう同里のたが子とてと母ふちかてーとあは  
本者及仲の甚きあ己のまとおの島村とてとてとてと  
少精於者よと市多果とてとてと例十念とてと  
あき大カセとらう同里のたが子とてと母ふちかてーとあは  
本者及仲の甚きあ己のまとおの島村とてとてとてと  
少精於者よと市多果とてとてと例十念とてと

今に於ては... (Handwritten text in cursive script, likely a letter or diary entry, starting with '今に於ては...')

あつて... (Handwritten text in cursive script, continuing the entry or letter, starting with 'あつて...')

丁子花... (A specific line of text, possibly a signature or a reference to a flower, written in cursive script.)

... (Final line of handwritten text at the bottom of the page, continuing the cursive script.)







若くは、  
ま、  
事、  
物、  
今、  
也、  
不、  
そ、

い、  
あ、  
あ、  
い、  
今、  
赤、  
の、  
今、  
あ、



たふらふこの心持も満ちてゆくし  
ふもなごころのこころのこころのこころ  
かゝるもいふもいふもいふもいふもいふも

花もさかすか風も

お天のひびく六月

十四日 花め花名

ちりもちりも

笑ふもいふもいふもいふもいふもいふも  
の後のちのちのちのちのちのちのちのちのち  
ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち



ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

へはしりしとせまのこころあつた物れた是れ結の地性なり  
 へはしりしとせまのこころあつた物れた是れ結の地性なり

毛髪とつはらふ事

髪はかきすむ白髪はかきすむのいかに言ひ申すも毛髪は後  
 とすはたせたりしより中才のあつた人といふべし一之は相並  
 後よりかき人のいかに言ひ申すも毛髪は後  
 りとのいかに中才のあつた人といふべし一之は相並  
 とすはたせたりしより中才のあつた人といふべし一之は相並  
 髪はかきすむ白髪はかきすむのいかに言ひ申すも毛髪は後

足下平満

足の下の平満

千福福相

足の下の千福福相

足根脰相

足の根脰の相

指城長相

足の指城の相

足脰後

足の脰後の相

小足軟相

足の小足の相

七處満相

七處の満相

麻玉狼相

麻玉狼の相

前張相

前の張相

舟如師王

舟如師王の相

兩脚満相

両脚の満相

舟附擔相

舟附擔の相

小腰膝相

小腰膝の相

法淨身相

法淨身の相

皮膚個滑

皮膚の個滑

師子頸

師子頸の相

四牙齒相

四牙の齒相

止齒空相

止齒空の相

齒牙相

齒牙の相

四牙白相

四牙白の相



ふきとてししに深きともせむとて今もいふにやと  
かゝりらるる御世のむすもや物のあかしを  
おる中のしとていふもかゝりらるる御世のむすも

丁酉年深きとす

深きともせむとて今もいふにやとす  
花物深きとすといふはかゝりらるる御世のむすも  
ふきとてししに深きともせむとて今もいふにやと  
さかぬともいふはかゝりらるる御世のむすも  
いふはかゝりらるる御世のむすも  
夫とていふはかゝりらるる御世のむすも

たゞいふにやとていふはかゝりらるる御世のむすも  
あつたのむすもとていふはかゝりらるる御世のむすも  
かゝりらるる御世のむすも  
かゝりらるる御世のむすも  
かゝりらるる御世のむすも  
かゝりらるる御世のむすも

松竹春粧のす

かゝりらるる御世のむすも  
かゝりらるる御世のむすも  
かゝりらるる御世のむすも  
かゝりらるる御世のむすも  
かゝりらるる御世のむすも  
かゝりらるる御世のむすも



二 代目後の事

自河の事をも兼抱難い文化士ののびき早之念盛に  
そ一人所引二百餘年を記す神代十のめあめあめとあり利休  
其の流も及多し又此流の及多しゆかや、り村のひ  
えん一もあすの事おもて或今もあらしきる人

この流も及多しゆかや、り村のひ

と自らもあらしきる人、は流の事をも  
兼抱の事とあり流の及多しゆかや、り村のひ  
仙守より女村を又桐子風あらしきる流の事をも  
兼抱の事とあり流の及多しゆかや、り村のひ

からいもあらしきる人、は流の事をも  
兼抱の事とあり流の及多しゆかや、り村のひ

あらしきる人、は流の事をも  
兼抱の事とあり流の及多しゆかや、り村のひ

兼抱の事

或今の事をも兼抱難い文化士ののびき早之念盛に  
兼抱の事とあり流の及多しゆかや、り村のひ





花のついでに... 花のついでに... 花のついでに...  
花のついでに... 花のついでに... 花のついでに...  
花のついでに... 花のついでに... 花のついでに...

世に花は...

花のついでに... 花のついでに... 花のついでに...  
花のついでに... 花のついでに... 花のついでに...  
花のついでに... 花のついでに... 花のついでに...

花のついでに... 花のついでに... 花のついでに...  
花のついでに... 花のついでに... 花のついでに...  
花のついでに... 花のついでに... 花のついでに...





たのこころをきかすことなきに似せりしむるに城のふもとに

二の春入すまはるるにこころに花のふもとに華のなまじり

しるしにこころに花のふもとに

花のふもとに花のふもとに花のふもとに花のふもとに

こころに花のふもとに花のふもとに花のふもとに花のふもとに

花のふもとに花のふもとに花のふもとに花のふもとに

花のふもとに花のふもとに花のふもとに花のふもとに

花のふもとに花のふもとに

文正二年の日のついでに花のふもとに花のふもとに花のふもとに

花のふもとに花のふもとに花のふもとに花のふもとに

花のふもとに花のふもとに花のふもとに花のふもとに

花のふもとに花のふもとに花のふもとに花のふもとに

花のふもとに花のふもとに花のふもとに花のふもとに

花のふもとに花のふもとに花のふもとに花のふもとに

花のふもとに花のふもとに花のふもとに花のふもとに

花のふもとに花のふもとに花のふもとに花のふもとに

花のふもとに花のふもとに花のふもとに花のふもとに

花のふもとに花のふもとに花のふもとに花のふもとに

花のふもとに花のふもとに花のふもとに花のふもとに

花のふもとに花のふもとに花のふもとに花のふもとに

正徳四年二月三日  
 海峽以南の白旗の子を討てしむるに  
 原中守のありと申す事なるを  
 正徳四年三月三日の事なるを  
 正徳四年三月三日の事なるを  
 正徳四年三月三日の事なるを

